浄瑠璃寺九体阿弥陀中尊像の成立事情
― 迎接房教懐の往生思想との関わりをめぐって ―

髙橋知可（京都芸術大学）

浄瑠璃寺の九体阿弥陀如来像は、『浄瑠璃寺流記事』嘉承三年（1108）条にみえる新本堂の建立に続く「開眼供養」に着目して 12 世紀初頭の成立とされてきたが、近年では中尊像は脇仏に先立ち制作され、さらに平等院鳳凰堂阿弥陀如来像との造形的類似性から 11 世紀後半の成立とする見解が唱えられている。また、中尊像は来迎印を結ぶ阿弥陀坐像であるが、当時定印の阿弥陀坐像が多いなかで、来迎印を結ぶ理由についてはあまり議論されてこなかった。

これに関連して、かつて発表者は平安末期の『高野山往生伝』に記された迎接房教懐という興福寺僧に着目した。教懐は、11 世紀半ば頃の小田原に居し、迎接房の名の通り阿弥陀の迎接を願う往生思想に基づく浄土信仰を数十年にわたり小田原で展開し、その活動は興福寺の定誉から蔵俊、貞慶に繋がる同寺の浄土信仰の法流に関連付けられる。教懐の往生思想を思えば、従来では注目されていない『浄瑠璃寺流記事』延久三年（1071）条に「往生講始行之」とある往生講には教懐の関与が窺われる。また、その本尊には教懐の思想を反映した迎接像が安置された可能性が高いと考えられるのである。

ところで、迎接像については、阿弥陀聖衆来迎図等の絵画作例はいうまでもなく、「迎接の体」と史料に記される寛治八年（1094）頃成立の即成院阿弥陀如来・二十五菩薩像、本堂天井に二十五菩薩像が描かれた久安四年（1148）成立の三千院阿弥陀三尊像がある。また史料では『扶桑略記』寛徳二年（1045）条に「造堂宇安阿弥陀迎接之像、五日十座、供養演講」とあるように迎接像を安置する新堂での講が確認できる。さらに承暦三年（1079）永観撰『往生講式』冒頭の「先西壁安阿弥陀迎接像」は、『往生要集』「尋常別行」に記される「一佛像西壁安置」と同一の次第が説かれ、独尊像の安置形式も存在したことが窺われる。つまり、平安後期の迎接像は、阿弥陀聖衆来迎の視覚化と阿弥陀の迎接を希求する行儀のため、多様な造形につくられていたと考えられる。

こうした平安後期の迎接像のなかで、本発表では浄瑠璃寺の中尊像が結ぶ来迎印と光背の飛天像に注目したい。現存する四軀の光背飛天像は当初像とされ、楽器を奏でる姿から奏楽菩薩であることがわかる。同じく光背に奏楽菩薩像が配された滋賀・浄厳院の阿弥陀如来像（11 世紀末～12 世紀初）の存在を踏まえるなら、中尊像は阿弥陀聖衆をあらわす奏楽菩薩像を配した飛天光と、迎接の折に阿弥陀が結ぶ来迎印によって迎接像と認め得るものであろう。

先述した迎接房教懐の往生思想を考慮すると、迎接像である中尊像は、脇仏に先立ち独尊像にて往生講の本尊として制作され、その成立は往生講が行われた延久三年（1071）を遡る可能性が考えられる。また、当時興福寺では覚助ら定朝第二世代が造仏に携わっていた。教懐と興福寺との関係性に鑑みれば、中尊像が定朝様を瑞々しくあらわすことも理解できるのではなかろうか。